



『アイ・アム・ヒッピー』

出版記念イベント報告

森と出版
栞田屋 昭子



↑上は西荻窪・ほびつと村学校、右上は京都・ビレッジにて 写真提供…高橋利直

「今から四半世紀前、東京オリンピックをステップにして、日本が高度成長の大波に乗る頃、「危い(やばい) この波に乗せられたら身の破滅だ！」と直感し、競争社会からドロップアウトし、商業主義に背をむけて人類の滅亡を予言する詩をもって、夜の新宿に彷徨い集まった一群の若者たちがいた。」(『アイ・アム・ヒッピー』より)

その一群に山田塊也と通称ボンがいた。ボンがこの『アイ・アム・ヒッピー』(日本のヒッピームーブメント史)を書いたのはもう四半世紀も前のこと。昨年11月、長い間絶版状態のこの本を増補改訂版として出すことにしたのは、たくさんのリクエストがあったこともあるけれど、ボンのメッセージが今もちっとも色褪せていないと思ったからだ。

そして昨年12月、出版記念イベントを、カウンター・カルチャーの古本カフェ「気流舎」と、ナオの遺品を引き受けたという山路君の「FLYING BOOKS」を皮切りに、今年4月から新宿「LA VANDERIA」、西荻窪「ほびつと村」、京都「VILLAGE」ですることができた。本を作る時もそうだったけれど、今回の出版記念イベントもまた、ボンの友達やボンの思いに賛同する人たちに助けられて、充実したい場を作りあげることができた。また、私にとってはボンたちがやってきたことを追いつながら人をつなげる「アイ・アム・ヒッピーの旅」となった。

第1段(弾は使いたくなかった)は、この本の資料作りの時にヒッピー年表のチェックをしてもらった風月のJUNさんのコーディネートで、私は当日座るだけというありがたいイベントをもらった。「気流舎」のふみさんの進行のもと、JUNさんが部族のこと、そしてきこりがデモの帰りに寄ってくれてミルキーウエイキャラバンからほびつと村の成り立ち、アリさん、コナツさんのライブ、蕾さんとクッシー、JUNさんのポエトリーリーディング。飛び入りまであって熱気でむせながら時間があっという間に過ぎてしまった。

東京を脱出して25年経つ私は、ここでたくさんのボンのファンに出会えたことはうれしかったのと同時に、ボンの影響を受けている人の幅広さと多さにとても驚いた。ボンはいわゆるヒッピー系の人達に支持されていると思いつ込んでいたからだ。ここでの人の出会いから出版記念イベントは、見えない何かの力に突き動かされるように次々産まれていった。まるでボンの仕業であるかのよう

に。
第2段、新宿。部族、対抗文化がこの地で産まれたという意味で、ここでイベントができる意味は深かった。当時の新宿に想いを馳せながら「夜の新宿に彷徨い集まった一群の若者たち」が何を求めていたのか、その空気を体感できたと思ったからだ。その想いを共有して、新宿のミニコミ誌を扱う本屋の老舗「模索舎」と企画した。

初対面の私に快くゲストトークの申し出に応じてくれた平井玄さん。学生の時代、卒論に日本の対抗文化を選んだ20代のめぐみちゃんは、若者対抗文化ディスカッションの進行を引き受けてくれた。そして、就職活動をみんなのようにする気がなくて、『アイ・アム・ヒッピー』をもって住む家探しのひとり旅をした大学4年生のじこちゃんを連れてきてくれた。ボンに会いに行った次の日に仕事を辞めてDJになったハルタ君は30代、ボンを尊敬している。サイケディックな空間作りを自ら提案してくれた。次々お店に入ってくる若者に私は「なんのイベントか知っていますか?」と思わず聞いてしまった。白熱したトークは延々続いた。かつて部族たちがしていたように……。

第3段「ほびつと村」。私は『アイ・アム・ヒッピー』を出すことが決まってから出版記念イベントを「ほびつと村」でしたいと思っていた。それは、「ほびつと村」の立ち上げはヒッピー、対抗文化、オルタナティブな生き方の歴史においてターニングポイントだと思っていたのと、それらを生み出す場だと思っているからだ。そう、なにを隠そう私にとってもほびつと村は人生のターニングポイントなのだ。ここがなければ『アイ・アム・ヒッピー』に出会うこともなかっただろうし、ましてや出版などしなかった。

ナワ・ブラサードのゆりこさんが「WE AER HIPPIY」のタイトルを考えてくれて、うちやんさんがかっこいいポスターを作ってくれてイベント準備はスタートした。今回こそはコーディネートと当日の進行をしてくれて、私は当事者から直接教えてもらうというお勉強会になった。

上映した『スワノセ・第四世界』の監督、上野圭一さんから上映にあたってのコメントが届き、『花祭り』の監督、藤枝静樹さんが駆けつけてくれてお話をしてくれるといううれしいプレゼントまであった。

第4段、京都。『アイ・アム・ヒッピー』はボンの歴史。だから京都のヒッピーの歴史を知りたく

て、山人水を主催している祖牛さんに花祭り以降のヒッピーの動きを聞いたかった。タイトルは「AER YOU HIPPIY?」。なぜこのタイトルにしたかという、イベントの内容を詰めていた時、「やっぱりヒッピーを呼ばないと」ということになったのだけれどヒッピーが深さなくて、ヒッピーってなんだろう…?という問いが私の中に生まれたからだ。

祖牛さんに私がインタビューという形でお話をしてもらった。東京のイベントが終わった後での祖牛さんの話は新鮮だった。花祭りに東京のヒッピーはヒッチハイクで行くのが主流なのに対して、京都ではチャーターバスで乗り付けたというのにはとても驚いた。京都は「大地に帰れ!自らの内に大地の呼吸を!」というよりは芸術活動に重点があったのだ。最後に「AER YOU HIPPIY?」の問いに祖牛さんは「NO」、「わしは求道者」と言い切った。

次に、はるさんの2000年飛騨高山・位山からビッグマウンテンまで歩いたwalkの始まりとなった、ボンとバヒ・キャダニーとの再会の話は劇的だった。

イベントを終えて思うことは、半世紀も前のボンや部族たち「新宿を彷徨い歩いた群衆」と同じように今も、大多数の生き方では生きづらくて、自分らしい生き方を探求している「彷徨い歩く群衆」はいて、彼らはボンからその生き方を選ぶ勇気とメッセージを受け取ろうとしているのだと思った。

結局ヒッピーという人には出会えなかった。出会ったのは、誰からも指図されず我がままを生き抜き「宇宙の微塵となりて無方の空にちりばろう」とする自由な輝く星たちだった。私の「アイ・アム・ヒッピー」の旅はまだまだ続いている……。



アイ・アム・ヒッピー 増補改訂版
A5版340頁箱入二五〇〇円
ボンのカラー絵、ヒッピー年表等有
森と出版 090-3782-6404
hippiepon@yahoo.co.jp